

# 学生の保育者の役割に対する意識について

## —「つどいの広場」への参加及び幼稚園1年次実習の経験を通して—

中 田 章 子

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

### Students' consciousness of the role of nurses :Participating in "Tudo-no-Hiroba" and the first practical training at kindergartens

Noriko Nakata

*Naragakuen University Narabunka Women's College*

本研究では、学生が保育者として必要な資質・能力の獲得に向けて学ぶ過程において、子どもたちの成長に大きな影響を与える人的環境としての保育者の役割に対する学生の意識について注目した。本学では授業だけでなく、学内で開設されている「つどいの広場」への参加を促すことで、学生の保育への関心を高めると共に、実際に広場スタッフ等の姿に触れて保育者としての役割を意識させる試みを行っている。学生はその体験を経て、幼稚園1年次実習に臨んでいる。今回、「つどいの広場」参加後及び幼稚園1年次実習前後のアンケートを行い、広場参加及び実習を通して、保育者に必要となる役割についてどのような意識をもつようになったかについて調査した。その結果、学生の保育者となるための資質や能力が、大学での学びと実際の保育現場の具体的な場面での体験を通して得られていくということが、学生の振り返りを基に確認できた。

キーワード：保育者の役割、幼稚園実習、保育体験

## 1. はじめに

幼児にとって重要な人的環境である教師の役割については、現行の幼稚園教育要領<sup>1)</sup>第1章総則に、幼児期の教育の重要性、幼稚園教育の基本とともに記され、教師は、日々の保育を通して幼児との信頼関係構築に努め、幼児の主体的な活動を確保するために、一人一人の行動理解と予想に基づく計画的な環境の構成や、一人一人の活動の場面に応じて様々な役割を果たして、活動を豊かで意味あるものとしなければならないとある。また、幼稚園教育要領解説<sup>2)</sup>には、「特に幼稚園教育が環境を通して行う教育であるという点において、教師の担う役割は大きい。一人一人の幼児に対する理解に基づき、環境を計画的に構成し、幼児の主体的な活動を直接援助すると同時に、教師自らも幼児にとって重要な環境の一

つであることをまず念頭に置く必要がある。」と述べられている。幼稚園教育における教師の役割の具体的な姿としては、「幼児が行っている活動の理解者」「幼児との共同作業者」「幼児と共鳴する者」「憧れを形成するモデル」「遊びの援助者」が挙げられ、それらを行う前提として、「幼児が精神的に安定するためのよりどころとなることが重要である。」とも書かれている。岩立（2016）<sup>3)</sup>は、これらの姿が教師の専門性でもありとし、その資質や能力は、教育の実践課程で教員が何をするのかという実際の内容から捉えることもでき、幼児の理解、保育の計画、環境構成、援助や環境の再構成、評価・指導計画・実践の改善という、保育の循環的な取り組みのプロセスにおける具体的な営みからも捉えることができること、さらに、「幼稚園教員を目指す学生は、これら一つ一つを養成校での学びと、教育実習やその他の実践体験を通して具体的に身に付けていくことになる。」と述べている。

本学では、将来保育者となる学生が、保育者としての役割やあるべき姿の重要性を認識し、実践力を身に付けることができるように、入学後オリエンテーションを実施したり、シラバスにカリキュラム・マップを挙げて各授業の関連性を示し、学生が体系的に授業を受講できるようにしたりしている。中でも、本学の特徴として平成22年度から学内にて開設している「つどいの広場」への参加を促し、実際に広場スタッフ等の姿に触れて、保育者としての役割を認識させる試みを行っている。学生はこうした経験を経て、幼稚園1年次実習（見学・観察実習中心）に臨んでいる。今回筆者は、学生に対して「つどいの広場」参加後及び幼稚園1年次実習前後にアンケートを行い、広場参加及び実習を通して、保育者に必要となる役割についてどのような意識をもつようになったかについて調査した。

## 2. 研究の方法

平成29年度2年コースI回生及び長期履修コースII回生113名を対象学生とした。

なお、対象者には本研究の意図を伝え、すべての調査内容において個人を特定しないものであること、研究の目的以外には使用しないことを説明し了解を得た。

### 2.1 「つどいの広場」参加後のアンケート調査

学生は、入学してすぐの平成29年5月～平成30年2月にかけて、「つどいの広場」に、AGHの時間を利用してグループに分かれて参加したり、授業時間外で自主参加をしたりしている。平成29年12月～平成30年1月に広場への参加体験に関するアンケートを実施した。アンケートの質問項目は、「広場に参加してどのような点が良かったか。」「広場に参加してどのような成果や変化があったか。」である。筆者は、学生に、実習前の広場への参加体験を通して、子どもに積極的に関わり一緒に遊んだり過ごしたりする楽しさを感じることや、年齢による発達の違いや子ども一人一人の特性に気付けるようになることを期待した。なお、本調査の際、本研究対象者の1学年上の実習経験者にも同様のアンケートを実施したため、結果と考察ではその群との比較を通じた考察を行った。

## 2.2 幼稚園1年次実習前後のアンケート調査

学生は、平成30年1月11日～1月30日の内8日間幼稚園1年次実習（見学・観察実習中心）に参加した。筆者は、実習前（平成29年11月～12月）と実習後（平成30年4月）の2回、アンケート調査を行い、実習前後で保育者として大切であると感じている役割についての考えがどのように変化したかを探り、現場での体験が保育者の役割に対する理解にどのように影響したかを明らかにすることとした。

アンケートは「保育者の役割に関するアンケート」とし、学生が、保育を行う際に保育者として求められる姿や事柄をイメージして、保育者の役割として関連付けて考えられるようにした。アンケート内容としては、実習前・後共、Q1「保育を行う上で、あなたが保育者の役割として特に大切であると思うのは何か。」を問い、大切だと思う役割項目を3択して、それぞれに選択理由を記入させるようにした。実習後にも同じ質問に答えさせた後、Q2「実習前と実習後で、大切だと思う保育者の役割について、なぜ変わったのか、または、変わらなかったのか。」の理由や考えを記述することも求めた。

なお、Q1保育者の役割について選択させる項目は、平成20年発行幼稚園教育要領解説第3章第2節6「教師の役割」を参考にして、以下の9項目とした。

- ・子どもの発達や一人一人の特性を理解すること
- ・発達に応じた指導計画を作成したり、改善したりすること
- ・子どもの状況に応じて柔軟に保育を展開すること
- ・主体的な遊びを引き出す環境を構成すること
- ・子どもの生活や行動のモデルとなること
- ・子どもの遊びや活動の援助をすること
- ・子どもと一緒に生活や遊びを楽しむこと
- ・保護者の子育てや相談に応じること
- ・その他

1年次実習では、学生が初めて現場に出て保育者意識をもって行動することから、筆者は、体験を通して、①子どもとコミュニケーションを図りながら発達や特性の理解に努める、②発達や個々に応じた関わり方を考え自分なりに実践する、③担任等の姿から子どもの状況や発達に応じた保育の在り方を学ぶことを期待した。

## 2.3 実習日誌から

学生は、日誌の「実習後の感想及び反省」に、実習中に特に印象に残った子どもや担任等保育者の姿を振り返り、体験によって新たに気付いたことや学びを記入している。記入内容から保育者の役割として2.2のアンケートに掲げた内容がどのように書かれているかを調べ、意識の根拠になったと考えられる具体的内容を探った。

### 3. 調査結果及び考察

#### 3.1 「つどいの広場」参加後のアンケート

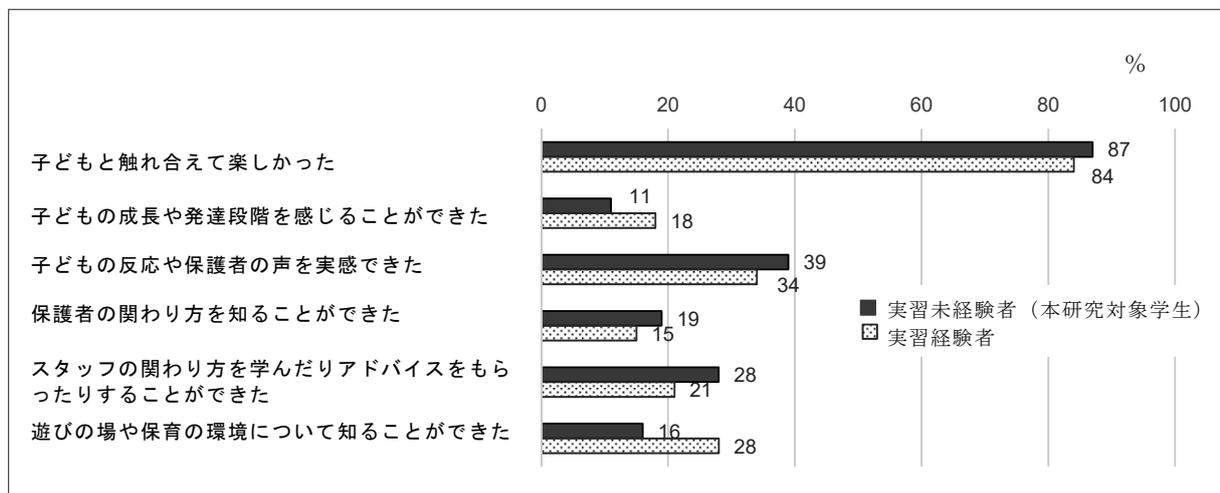


図1 広場に参加してよかったこと

図1は、広場に参加してどのような点がよかったかについて、各学生に2項目選択させた結果である。これによると、実習経験の有無にかかわらず、子どもと触れ合う楽しさを実感した学生が80%以上あり、次に子どもの反応や保護者の話を実感できたことが続く。また、実習未経験者は、スタッフの関わり方から多くを学び、アドバイスをもらえて良かったと感じている。この後に幼稚園実習に臨むにあたり、子どもの関わり方の具体的な方法について新たな気づきがあったことが考えられる。

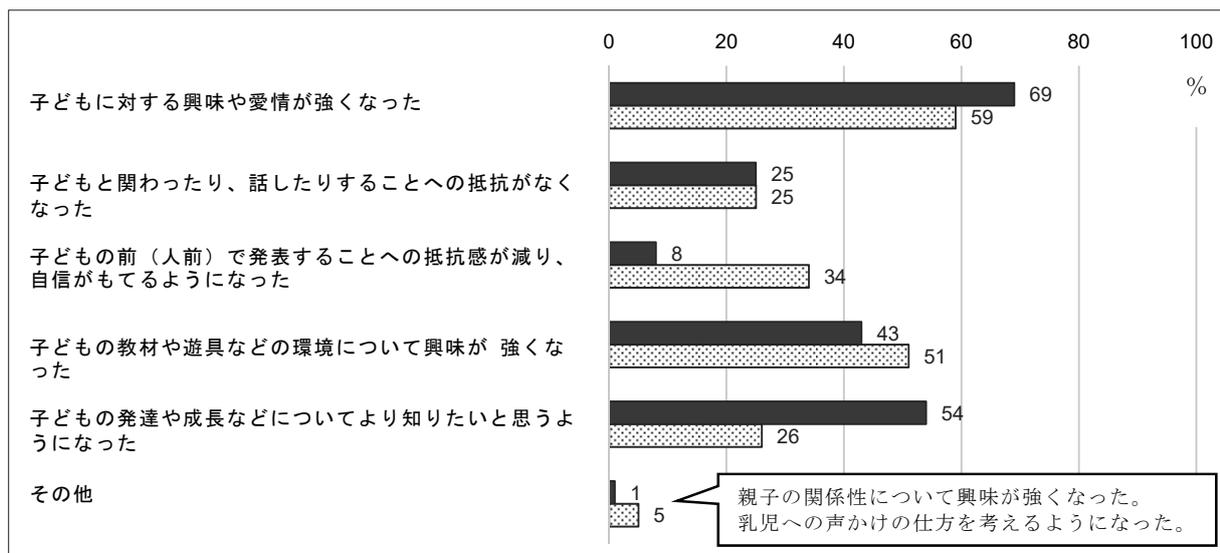


図2 広場参加による成果や変化

図2は、広場に参加したことでのどのような成果や変化があったかについて、各学生に2項目選択させた結果である。これによると、実習経験の有無に関係なく、子どもと触れ合う楽しさを実感したという図1の結果と連動して、子どもへの愛情が増した学生が多かった。実習経験者は、「子どもの発達や成長などについてより知りたいと思うようになった」の選択は少ないが、実習前の学生は、2番目に子どもの発達や成長についてより知りたいと答えた者が多く54%、広場環境への興味が増加している者が43%いることから、感覚的なものが知識追究につながっていることがわかる。また、実習未経験者の場合、現時点で子どもと触れ合うことそのものが新鮮であり、つどいの広場体験のみでは、子どもの前に立つ自信には繋がっていないことがわかる。

その他、学生の感想は以下の表1の通りである。このことから、子どもと直接触れ合うことで、子どもの発達や成長の違いに気付いていることが、図2の主な回答に反映されている。また、保護者の思いを聞くことが、今までにない貴重な経験となっていることが、図1の回答にも反映されている。

表1 広場に参加した感想（抜粋）

- ・子どもを近くに感じることで、今まで以上に子どもに興味をもてるようになった。赤ちゃんを抱かせてもらい、とても嬉しかった。
- ・最初は緊張してうまく関われるか不安だったが、とにかく笑顔が大切だと気付かされた。
- ・同年齢でも発達の違いを感じることができた。また、発達段階によってどのような遊びに興味を示すのかも知ることができた。
- ・実際に触れ合うことで習ったことを実感できたり、子どもの実際の行動から違う部分があったりした。
- ・異年齢が同じ空間の中で、どのようにすれば子どもたちが安全に遊ぶことができるのかを考える機会になった。
- ・子どもたちと関わるのは思っていたより大変で、臨機応変に対応できることが大切だと感じた。
- ・保護者の話を直接聞いたことはよい経験になり、どんな保育を保護者が求めているのかがわかった。また、広場利用のきっかけなどを聞くことで、子育て支援についてより興味が強くなった。保護者の子どもへの関わり方が見られたのも勉強になった。
- ・親子に関わるスタッフの方の姿やアドバイスが勉強になった。

### 3.2 幼稚園1年次実習前後のアンケート

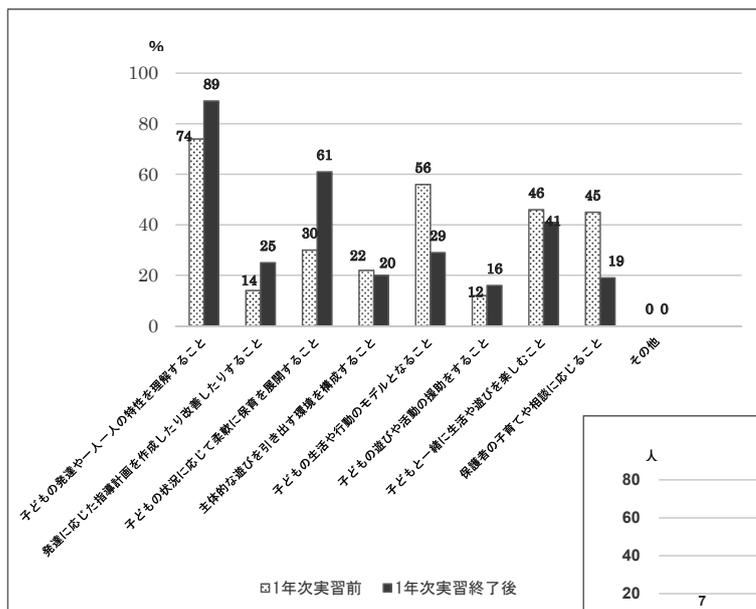


図3 保育者として大切だと考える役割

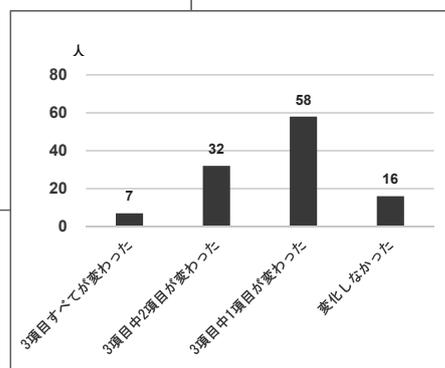


図4 実習前と実習後の項目の変化

図3より、学生は、実習前後とも70%以上が「子どもの発達や特性の理解」が大切であると考えており最も多く、実習経験後は更に74%から89%に上昇している。実習経験後の割合が増えた項目は、「状況に応じた柔軟な保育の展開」(31%)、「発達や特性の理解」(15%)、「発達に応じた指導計画の作成や改善」(11%)である。一方、大きく減少した項目は、「生活や行動のモデルとなる」(27%)、「保護者の子育てや相談に応じる」(26%)であり、他の項目については、変化に大差は見られなかった。

次に図4は、大切であると考えている役割が学生個々においてどのように変化したかを自己評価させたものであり、実習前後で、113名中97名(86%)の学生が項目に変化があったと回答した。変化した理由については、「先生方と話したり保育中の姿を見たりして、何を意識して保育をしているのか一つの行動の意図や思いが伝わってきたので、自分の考えが変わった。」(34名)、「自分が保育者として行動した時に、想像していたことと実際では違うことが多く、戸惑いや迷いがたくさんあった。」(20名)、「子どもと実際に関わって、自分が気を付けなければいけないことが明確になり、実習前とは考えが変わった。」(18名)、「子ども目線に立って考えることで、保育者として必要なことがわかってきた。」(17名)等がある。一方、実習前後で全く変化が見られなかった16名の選択項目は、「発達や特性の理解」(15名)、「状況に応じた柔軟な保育の展開」(9名)、「子どもと一緒に生活や遊びを楽しむ」(8名)、「生活や行動のモデルとなる」(7名)、「保護者の子育てや相談に応じる」(4名)、「主体的な遊びを引き出す環境を構成する」等であり、全く変わらなかった理由の多くは、「大切であると選択したことを意識して実習に臨んだから。」であった。

さらに、筆者が1年次実習で学生に期待する3項目に注目し、選択理由を一部抜粋すると以下のようである。

#### 「子どもの発達や一人一人の特性を理解すること」に関して

##### 実習前

- ・発達理解ができないと、年齢に応じた保育ができない。
- ・一人一人の特性を理解しないと、偏った保育になってしまう。

##### 実習後

- ・想像以上にクラスで個人差があることに驚いた。その状況に対応するためには、個々の発達を理解した援助が必要だということを痛感した。
- ・一人一人を理解した対応ができないと、きちんとしたかわりができないことや良さを引き出せないことを実感した。
- ・子どもには得意、不得意があり、先生がそれを基にグループ分けをしていた。

子どもの発達や特性の理解については、実習前から多くの学生が大切な役割であると捉えていた項目である。実習後には、さらに選択者が増え、学生が用いた言葉を抜き出すと、子どもの発達や特性には「個人差」(17名)や「性格の違い」(10名)「得意・不得意」(5名)があること、さらにそれらを理解することで「きちんとした関わり」(24名)「適切な保育」(7名)ができ、「子どものその後の意欲」「良さの引き出し」に繋がることに気付いている。他に「子どもとの信頼関係構築」には、何よりも発達や特性の理解が必要であることも記している。

#### 『子どもの状況に応じて柔軟に保育を展開すること』に関して

##### 実習前

- ・子どもの思いや考えを受け止め展開しないと、子どもが力を発揮できない。
- ・保育はいつどのような状況になるかわからないから、対応できる臨機応変さが大事。

##### 実習後

- ・子どもから出てきたアイデアなどを取り入れた方が、全員楽しく活動できることがわかった。
- ・子ども達の意見や考えを聞き保育を進めることで、子ども達が主体的に動けることがわかった。
- ・先生が常に子どもたちの意見を聞きながら、どうしていきたいのか叶えられるように工夫していたから。

柔軟な保育の展開については、実習前に選択した他の項目からの移行が43名あり、実習前後の変化としては最も大きかった。実習後は柔軟な保育展開として、担任が「子ども達の意見や考えを聞いて進めていた」(10名)や、「子どもからのアイデアを取り入れていた」(5名)ことが印象的であったことが伺われる。また、実習前にすでに、柔軟な展開には臨機応変さが必要であると気付いていた学生もいたが、実習後には、さらに臨機応変さの必要性を感じている。そのきっかけとして、学生自身が子ども

の行動予測の難しさを実感したこともあるが、常に子どもたちの意見を聞きながら保育展開の仕方を工夫していた保育者の姿が大きく関連している。さらに、担任による柔軟な保育展開が、「子どもの主体性」(5名)や「全員楽しく活動できること」(2名)に繋がることにも気付いている。実習前の広場体験では、参加している子どもが主に0歳～3歳であり、子どもの思いや意見を聞いたり子どもからのアイデアを取り入れたりして保育を見たり考えたりする経験がほとんどなく、どちらかと言えば、保育者主導の保育展開である。今回の実習で担任の保育を継続観察して、担任のかかわり方や保育の展開の仕方、その後の子ども達の言動が変わっていく様子を見ることができたことが選択する理由になったと考える。

### 「子どもの遊びや生活の援助をすること」に関して

#### 実習前

- ・常に危険なことはないかを見て援助することが必要。
- ・保育者が関わることで、子どもだけではできない新たな遊びが生まれるから。

#### 実習後

- ・遊びの中で、常に子どもの考えを引き出し、遊びが広がるような援助が必要であることを実感した。
- ・子ども同士の遊びの中で保育者の力が必要となる部分も多くあったので、何を相手に伝えたいか等接して理解する必要があるがあった。
- ・発達段階や個々に応じた援助をすることで、子どもの表情から達成感が味わえることや、意欲や自信に繋がることがわかった。

遊びや生活の援助は、他の項目に比べて、実習前後共選択した学生が最も少ない。その中でも、実習前は、援助を安全面第一の理由と考えている者が多い。実習後は、援助の仕方を「遊びが発展するように」(3名)「個々の思いを察して応じる」(2名)とわかり、子どもが遊ぶ過程で保育者の力が必要となる場面を見極める必要性にも気付いている。また、援助することが「達成感が味わえる」「自信や意欲に繋がる」と、その後の子どもの変化から捉えたこともわかる。保育者として子どもの生活や遊びにおける事前の安全面の配慮や活動中の援助は必須であるが、実習前に広場で主に乳幼児に接してきた学生にとっては、子どもの遊びや生活の援助が具体的にイメージできる経験がまだまだ少なかったことが伺われる。筆者は、学生が発達や個々に応じた関わり方を考え自分なりに実践することを1年次実習に期待した。援助する際には「冷静な対応が必要」と自分自身を反省して述べている者もいるが、自身の援助がその後子どもたちにどのように影響したかという追跡よりも、担任やそれを受けて変化していった子どもの姿から援助の意味や必要性を考えたことが読み取れる。

### 3.3 実習日誌「実習後の感想及び反省」より

実習後の日誌からは、項目に挙げた保育者の役割との関連を様々な状況から具体的に知ることができる。感想及び反省では、学生全体の4割が「子どもの発達や一人一人の特性を理解する」ことや、「子どもの遊びや活動を援助する」ことについての内容を記している。以下は、実習での学生自身の気付きが読み取れるものを抜粋して示した。

### 「子どもの発達や一人一人の特性を理解すること」に関して

- ・ 4歳児は、友達が何をしているかに気付き、一人遊びから複数人の遊びができるようになるためにとっても大切な時期であることを学びました。周りの子どもがどのような遊びをしているのかに気付き、一緒に遊ぼうとする心やどのような思いでいるのかを知ろうとする、伝えようとする心を育てることが教師の役割であると気付きました。先生から「言葉のやり取りができるように声をかけている。」と教えていただき、関わり方を見せていただきながら自分なりに実践しました。

(H・M)

〈指導コメント〉子ども達に“こう育ってほしい”と言う願いをもつことはとても大事です。子ども達が日々成長していけるように、一人一人を見て、教師自身の関わりを常に見直す気持ちをもち続けることが必要です。

- ・ 今まで授業で習ってきた子ども像との違いに戸惑いもあり、初めはどう話しかけたらよいのか不安ありましたが、どんな内容でも話すことで仲良くなり、最後はとても楽しかったです。次に子どもたちと関わる時には、指導いただいたように腰を下ろして、どんなことからでも会話を広げて子ども達をよく知ろうと思いました。子どもの得意・不得意をわかった上で言葉かけや援助をする難しさも知りました。(N・M)

〈指導コメント〉笑顔で子どもたちと関わっている姿が印象的でした。5歳児クラスに入り、保育者が、どのように子ども一人一人と関わっているのか、クラスとしてどのような指導をしているのか、また子どもの姿や発達についても、一緒に生活する中で見ることができたと思います。

### 「子どもの遊びや活動の援助をすること」に関して

- ・ ボールを片付けずに違う遊びをしている子どもに、「片付けてから遊ぼうね。」と声をかけましたが、それ以上の言葉をかけることができませんでした。このような場合、どのような声掛けをすれば子どもは進んで片付けられるのかなと思いました。また、子ども達と双六をして遊ぶ中で、遊び方や順番を守ることの大切さなどを伝えることが難しく、毎回なかなかゲームが進まないことがありました。(Y・Y)

〈指導コメント〉「うまくいかなかった」ということを忘れないでください。そして、うまくいかなかったのはなぜか、どうしたらうまくいくのかを考えるようにしましょう。

- ・ 好きな遊びをしている時でも、子どもが自分から進んで行動できるような環境を作っておくことや、子どもが遊びを通して成長できるような援助をすることが保育者にとって大切だと実感しました。子どもにとって必要な援助は異なり、感じていることや考えていることも違うということや頭では理解できていても、実際に関わったり遊びに参加したりすると同じような声掛けばかりになってしまったり、遊びに入り込みすぎていた場面があったりしたと思います。先生から教わったように、なるべく見守ることも必要だと学びました。直接的な援助ばかりでなく、子どもの気持ちを大切に、子ども達が自分で考え行動できることがとても重要で、成長につながることを実感することができました。(N・K)

〈指導コメント〉最初は見守るということが難しく、たくさん援助をしてしまっていたのが、だんだんと年齢に合った声掛けや援助を心がけて子どもたちと関わるできるようになりましたね。一人一人のことをよく理解し、その子に合ったかかわり方が大事です。援助の仕方は、成長の段階はもちろん、生活環境でも違ってきます。

実習日誌には、初めての实習に不安や緊張感をもって臨んだということや、技術面の向上を目指す必要性についても多く書かれているが、保育の一場面を捉えて学生自身が子どもへの関わり方を反省し、保育者としてどうすべきなのかを考えるきっかけにもなっていることがわかる。さらに担任からの指導コメントは、保育者としての姿勢を示して学生の意識をさらに明確にするものになっている。

## 4. まとめ

学生は、初めての实習で、何よりも子どもとうまくコミュニケーションがとれるだろうかという思いを強く持ちながら臨む。アンケートで、実習前・後共、「子どもの発達や一人一人の特性を理解すること」の数値が高いことから、保育者として子どもの発達や特性を理解して信頼関係を構築していくことこそが、多くの学生にとって、保育者として優先すべきものであると考えたからだと考える。また、学生自身が実際に保育者として行動したことの振り返りと共に、担任の保育を継続して見たことにより、子どもにとってどのような保育が必要なのかを感じる事ができたことの意味は大きい。子どもの成長に見通しをもって保育を考え、子どもの思いや反応を受け止めながら柔軟に保育展開できることが、保育者としての専門的能力であることを担任の姿から認識したのではないだろうか。また、項目ごとの選択理由や実習日誌の感想や反省からは、実習での一場面一場面が、保育者の役割について考える根拠として学生の中に蓄積されたことがわかる。実際に自分が子どもと関わってどのように感じ、保育者としてどのようにすることが必要だったかと考えたプロセスが、保育者の役割の重要性を認識していくことに繋がっていくことを具体的な記述から確認できた。

一方、つどいの広場の経験と実習の関係性を見ると、実習前のアンケートで、「子どもの発達や一人一人の特性を理解すること」の数値が他と比べて高いのは、広場への参加による調査結果で、「子どもに関する興味や愛情が強くなった」「子どもの発達や成長などについてより知りたいと思うようになった」の数値が高かったことと関連していることが考えられる。実習前の広場体験による気持ちの変化が、保育者として大切な役割についての考えにもつながっているのではないか。さらに、実習前に広場で直接保護者から子育ての不安や大変さなどを聞き、保護者支援の大切さを感じたものの、実習後は、「保護者の子育てや相談に応じること」の数値が大きく減少している。実習では担任が保護者相談に応じる姿を見て必要性を感じたものの、保護者の思いを実感する直接的な機会がほとんどなかったことがわかる。今後、保育者には、一層保護者と情報交換等を密にし連携して子育てをしていくことが求められる。将来保育者となる学生にとって、実習では経験できにくい保護者の支援について学ぶことのできる「つどいの広場」の存在価値は大きいと考える。なお、実習後にも広場に自主参加した学生の感想では、子ども一人一人を意識して追視している様子や、関わり方を考えて試みたことでの子どもの変化に気づき、さらにどのようにすることで子どもに楽しさが感じられるようになるのかなど、子どもへの深い読み取りや、保育者としての援助の仕方、保育の在り方を考えようとする内容が見られる。このことから、1年次実習での経験がその後の広場での学生の見方にも反映されていることがわかる。(付表2)

本稿では、主に1年次実習で学生に期待するものに関連して調査報告をしたが、「はじめに」にも記した、

学生にとって保育者となるための資質や能力が、大学での学びと実際の保育現場の具体的場面での体験を通して得られて行くということが、学生の振り返りを基に確認できた。実習という機会を通して担任等保育者を観察し、保育方法や技術を学び、自分なりに実践することで保育者の役割の重要性に気付き、子どもにとっての影響力の大きさを知ることができたのではないだろうか。学生は、保育者となるための学びをスタートしたばかりである。今後、更に座学で学んだ知識と保育所や幼稚園等の実習、つどいの広場での経験を関連させながら、図3に示したような保育者の多様な役割について意識を深め、保育者となるために必要な資質や能力の向上を目指してくれることを期待したい。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領. P5 フレーベル館
- 2) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. P116-118 フレーベル館
- 3) 岩立京子 (2016) 保育学講座4—保育者を生きる—. P227-228 日本保育学会

## 参考文献

- ・ 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説 : P214-216
- ・ 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部 (2017) 平成29年度授業科目内容〔シラバス〕. P5

付表1 幼稚園1年次実習前後のアンケート項目別選択理由（抜粋）

	実 習 前	実 習 後
一人一人の発達や特性の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達理解ができないと年齢に応じた保育ができない。</li> <li>・理解することで、一人一人の可能性を引き出すことができる。</li> <li>・一人一人の特性を理解しないと偏った保育になってしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人を理解した対応ができないと、きちんとした関わりができないことや良さを引き出せないことを実感した。</li> <li>・想像以上にクラスで個人差があることに驚いた。その状況に対応するためには、個々の発達を理解した援助が必要だということを痛感した。</li> <li>・一人一人を理解すると信頼関係が早く作れた。</li> <li>・子どもには得意・不得意があり先生がそれを基にグループ分けをしていたから。</li> <li>・子ども個々の対する先生の言葉がけの違いで、その後意欲につながった場面を多く見たから。</li> </ul>
発達に応じた指導計画の作成・改善	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画を立てることで保育がスムーズに進む。</li> <li>・発達に応じた指導計画を立て、実践することが子どもの成長に必ず繋がる。</li> <li>・保育者としてPDCAサイクルが何よりも大事。</li> <li>・その時、その年齢でできることを考え計画することで、子どもが活動する楽しさを味わえるから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども達の状況を予想した計画では、活動がスムーズに行えるだけでなく、トラブル等の対応も考えないといけないことを学んだ。</li> <li>・単に子どもの一つ一つの行動を援助することだけが成長には繋がらないことがわかった。何よりもまず年齢に合った保育計画が大事。</li> <li>・実際に部分実習案を立ててみて、一人一人を理解しながらも全員の発達を考える必要性がわかった。</li> <li>・発達に合った計画を立てないと、安易すぎて成長できるところができなかつたり、難しすぎると意欲が高まらなかつたりすることを感じた。</li> <li>・設定保育をした際に、できない子がいることを十分考えておらず、改善点がたくさんあった。</li> <li>・遊びの中で日々できることが増えたり、状況が変わったりすることを実感したので、その都度子どもが学べる計画を考えることが必要だと思った。</li> </ul>
子どもの状況に応じた柔軟な保育展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの思いや考えを受け止め展開しないと、子どもが力を発揮できない。</li> <li>・毎日変化のある中で、柔軟に保育展開しないと子どもにとって意味のない保育になる。</li> <li>・保育はいつどのような状況になるかはわからないから、対応できる臨機応変さが大事。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生が常に子ども達の意見を聞きながら、どうしていきたいのか叶えられるように工夫していたから。</li> <li>・先生が、活動の計画を子どもの様子や意見を基に変更していたので柔軟さは大事だと思った。</li> <li>・子どもから出てきたアイデアなどを取り入れた方が、全員楽しく活動できることが分かった。</li> <li>・遊びや活動を進める中で、子どもが怒り出したり泣き出したりなど想像以外のことがあり、対応が必要であることを度々感じたから。</li> <li>・子ども達の意見や考えを聞き保育を進めることで、子どもたちが主体的に動けることが分かった。</li> <li>・この年齢だからできると思って部分実習をしたが、実際には子どもたちにとって難しかったということに気付いた。</li> <li>・予定していた通りに子どもが行動せず、集中させたり確認したりする際に手遊びをするなどの展開が多くあった。</li> </ul>

<p>主体的な遊びを 引き出す 環境の 構成</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが主体的に動けることは、将来の力につながるから。</li> <li>・保育者の指示で行動するのではなく、子ども自らが取り組もうとする環境があってこそ、考え行動する力が育つ。</li> <li>・遊びから様々なことを学ぶので、その環境は特に大事。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生の指示のもと、子どもの遊びを引き出す環境を実際に構成して、取り組んでいる子どもの姿から興味関心を広げる大切さに気付いた。</li> <li>・設定していたものを自分なりに変えたり遊び方やルールを考えたりして、子どもたちが自分たちなりに工夫している姿に驚いた。</li> <li>・子ども達が楽しそうに遊んでいる姿を見て、伸び伸びと遊べる環境づくりが何よりも大切だと感じた。</li> <li>・年齢に応じて遊具や道具を変えるなど、工夫しないと主体性が引き出せないことが分かった。</li> </ul>
<p>子どもの生活や 行動の モデル</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児期の大人の関わりは人格形成上大切で、大人を見て育っていく。</li> <li>・おそらく一番たくさんの授業で、「保育者は幼児のモデルでなければならない」と学んだから。</li> <li>・子どもにとっては、初めての先生であるから責任は大きい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習中、子ども達に自分がよくみられているということが分かったので大切だと実感した。</li> <li>・園では保育者という身近な大人の様子を見て学び成長するので、子どもと接するときは意識した言葉遣いや行動が必要だと思った。</li> <li>・子どもが担任の先生の言葉遣いを真似していて、影響力を感じた。</li> </ul>
<p>子どもの遊びや 活動の 援助</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常に危険なことはないか見て援助することが必要。</li> <li>・保育者が関わることで、子ども同士で遊んでいるだけではできない新たな遊びが生まれるから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びの中で、常に子どもの考えを引き出し、遊びが広がるような援助が必要であることを感じた。</li> <li>・子ども同士の遊びの中で、保育者の力が必要となる部分も多くあったので、何を相手に伝えたいか等接して理解する必要があった。</li> <li>・発達段階や個々に応じた援助をすることで、子どもの表情から達成感が味わえることや、意欲や自信に繋がることがわかった。</li> </ul>
<p>子どもと一緒に 遊びや生活を楽しむ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもと信頼関係を築くことができるから。</li> <li>・一緒に楽しむことで共感できることが増え、子どもの気持ちを理解しやすくなるから。</li> <li>・保育者が、家族と過ごす時間位一緒にいる存在であるから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもと一緒に何にでも楽しむということが案外難しいことだと分かったので、一層大事だと思うようになった。</li> <li>・子どもと一緒にいて楽しい人のところへ行くことがわかった。</li> <li>・子どもと一緒に楽しむことで、子どもが理解でき、その子の変化や成長も感じられたから。</li> <li>・信頼関係を築くために、保育者はまず子どもと一緒に楽しむことが大切だと教えてもらったし、自分もそう感じた。</li> <li>・一緒に楽しむことで、「やってみたい」と、子どもにより興味がわいてくることがわかったから。</li> <li>・子ども視線を考えて行動するようにしたところ、周りには私たちが楽しまない子どもが楽しめないことがわかった。遊びを楽しみ、笑顔でいることで子どもは安心できると実感できた。</li> <li>・歯磨きや弁当を食べる等、生活につながることも楽しみながらすることで、身に付くことも多いのではと思った。</li> </ul>

<p>保護者の子育てや相談に応じる</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親がストレスを抱えていると子どもに悪影響を及ぼすから。</li> <li>・虐待や育児不安は今特に問題となっていて、しっかり対応することが必要。</li> <li>・一人で抱え込む親が多いので、子どもと一緒に見守る姿勢が大事。</li> <li>・子育てを楽しめるようにすることが、保護者自身の養育力の向上に繋がる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生が、子育て不安を抱えている母親の相談に乗っている所をよく見たから。</li> <li>・悩みを解決できなくても、話を聞くだけでも保護者は楽になると思う。</li> </ul>
-----------------------	---	---

付表2 実習後の広場参加票の感想(抜粋)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・6か月の赤ちゃんの足の指の付け根に指を当てるとぐっと曲げることを聞き、やってみると何度もその様子が見られ面白かったです。鏡に映る自分にとっても興味を示し、手を伸ばしたり顔を近づけたりしていました。音のなる玩具を追視する様子も見られました。月齢による発達の違いや興味を示す遊びについて頭に入れておくことが、保育の展開に繋がる重要なことであると改めて学びました。</li> <li>・クレヨンで遊んでいる子どもがいて、ハンコのように「ポン」と言いながら紙に押し遊んでいました。一緒に子どもの動きに合わせて「ポン」と言うと、とても嬉しそうでした。クレヨンは描くものだと思っていましたが、子どもにとっては描くだけではない玩具だと知りました。また、釣りの玩具で遊んでいる子ども達が、釣った魚を見せてくれたので、「すごい」と言うと満足そうにしてくれましたが、子ども達がもっと楽しく遊べるようにできなかったことを反省しました。</li> </ul>
---